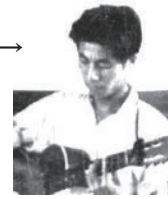
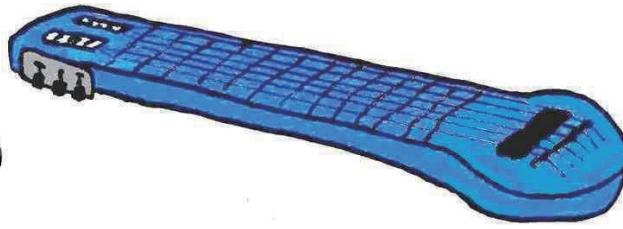


むかし「局アナ」いま「隠居」

1950年→

徳島初のスチールギター



上田 博章(絵・文)

1933年徳島市生まれ 大阪府在住
 ■京都大学農学部林学科卒業
 ■元朝日放送アナウンサー
 ■元池田マルチメディア代表取締役
 ■講演、朗読指導など以外は隠居中

一九五〇年(昭和25)当時、徳島市内は空襲の爪痕も生々しく、赤茶けた空地が随所に見られました。

そんな徳島に、スチールギターは一本もなかったし、戦時中にハワイアン楽器のような軟弱な楽器が徳島にあつたとは思えません。

ですから、徳島で最初にスチールギターを製作して演奏したのは敏さんという徳島県立城南高校二年生の男子生徒だったと断言していいでしょう。

敏さんは、ギターの巧い軟派系不良少年で、やたら電気に詳しい男でした。

私も、ラジオを作ったり、修理したりしていましたし、物理で受験するつもりで、授業も真面目に受けていたのですが、敏さんの電気はそんな半端なものではなく、自分の知識と技術で独立し、電気と共に人生を歩んだ逞しい電気野郎なのです。

*

高校二年の文化祭のあと、敏さんと喋っていました。

「今年の 僕らの軽音楽は、イマイチだったのう」

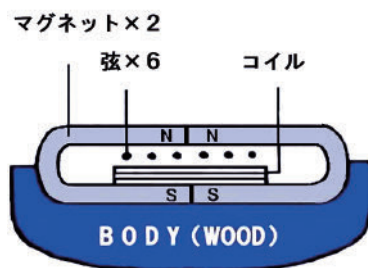
「この際、スチールギターを拵えて、ハワイアンバンド作つたらどうじゃ」

「弦の振動を電流に変える：つまり、スピーカーとは逆の装置を作つたらエエ」

スチールギターなど見たことも、触つたこともない私達でしたが、電気の力で何とかなると考えました。：となると壊れたラジオは貴重な部品です。

敏さんはスピーカーの廃物を一個しか持っていないので、私のお古を提供し、二個のスピーカーから取り出した磁石を左図のように、

【断面図】



NとN、SとSを合わせて強い磁場を作りました。

スピーカーの磁石には、髪の毛よりも細いコイルをぎっしり巻いた「ボビン」が付いています。

そのコイルを、敏さんはほどこながら小さな鉄板に巻き取りました。

「結局、何回巻いたん？」

最近になって訊ねたら、「そやなあ、軽く千五百回は巻いたやろなあ」

コイルの芯になる鉄板は幅5センチ程のブリキ板で、敏さんは壊れたバケツのブリキを切り取って作つたのですが、：、そういえば、あの頃のバケツはブリキ製だったのですねえ。



敏さんの家の隣は木工所だったのでギターの本体は隣から出た廃材です。

貧しい時代だっただけに、敏さんのスチールギターは安上がりでした。

楽器店で買ったのはペグ(弦巻き)と、バー(左手で弦を押さえる指型金属棒)。電気店で接続ジャッキと、シールド線を2メートル程。出費はこの程度です。

やがて、スチールギターが完成し、軽音楽の残党共が講堂にあるアンプの前に集まりました。

敏さんが苦労して作つたスチールギターにはケバケバしい真ツ青なペンキが塗りたくつてあります。

こんな垢抜けしない色のペンキは、きつと只で手に入れた塗料でしょう。

でもこの色を貶したり、塗り直しを提案したりする者はいませんでしたねえ。

真青なスチールギターをアンプにつないだ敏さんが、余裕の笑顔で弦を弾くと：キーン!!

本物そっくりの音色で、曲は「ナレオハワイ」ですわ。皆さん感動します。

「これで立派なハワイアンバンドが組めるぞよ」

「いま、敏さんが弾いとるナレオハワイを、バンドのテーマにしたらどうじゃ」

「この際、バンドの名前も、ナレオアイランダーズで行こか。意味：判らんけど」ワアワア言いながら命名されたのがナレオアイランダーズなるバンド名でした。

この 高校生バンドこそ、
由緒ある徳島のハワイアン
バンド第一号だったのです。

*

私たち世代はドレミファ
ではなく、戦時中のハニホ
ヘトでしたし、戦局が悪く
なった国民学校 五、六年生
頃から戦後の中学にかけて
殆んど音楽の授業を受けて
いなかったの、メンバー
一同 音符が読めません。

そんなバンドが 曲目を
増やそうと思ったら、耳で
覚えるしかないのです。

「もう、来年の文化祭は、
ハワイアンでパアツと行こ。
でもなあ、ナレオ ハワイと
アロハオエの一点張りでは
アカンぞ。レパートリーを
せつせと覚えて増やそ」

*

一九五一年(昭和26)の春、
三年生になった私達の心は
もうバンドマンでした。

「今年の文化祭では エエ
カッコせんならんぞ」

そんなとき、誰かが、
「プロのバンドみたいにな、
ベース(コントラバス)が
欲しいなあ。低音の和音を
ピチカートで刻むと演奏に

厚みが出てくるし、何しろ
ベースは見栄えがするわ」

そんなこと言ったって、
楽器もなければ弾き手も
いません。

しかし、我がバンドには
弦楽器の天才「市ちゃん」が
いたのです。

彼は、元 エエトコの子で、
戦前からバイオリンを習い、
そのバイオリンでジャズを
カッコ良く弾くような人材
でした。

ギターでもウクレレでも
軽くこなす 市ちゃんが、
「ベースを借りれるんなら、
ひと晩で何とかするよ」
…なんて呟くのです。

借りると言っても、当時、
徳島の街でコントラバスを
扱っていたのは、籠屋町の
八木楽器店だけでした。

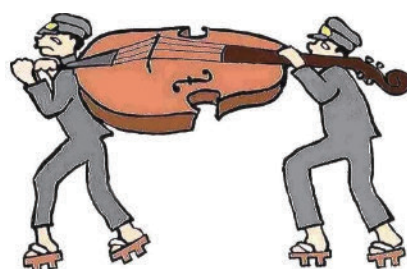
恐る恐る交渉してみたら、
何と一泊二日を只で借りる
ことができたのです。

文化祭の前日、私たちは
コントラバスを籠屋町から
城南高校まで一・五キロを
担いで運びました。

ベースが学校に着いたら、
天才 市ちゃんは、初対面の
楽器 相手に、深夜まで悪戦

苦闘しなければなりません。
「市ちゃんならやるじゃろ」
冷たいようですが、腹が

減って死にそうだった私は、
薄暗い講堂に 市ちゃんを
残して家に帰りました。



高校最終学年の文化祭が
開幕し、スチールギターは
全校生徒の前でキューンと
デビューしました。

ステージの左端は、天才
市ちゃんがベースを抱いて、
身体をユラユラさせながら、
キザな手つきで 太い弦を
弾くのが目立ちます。

その隣にサイドギターの
私がいて、更に その隣は…
五人の中央になりますから
バンドマスターの敏さんが
どつかと座り、膝に乗せた
真っ青なスチールギターを
弾いていました。

敏さんの右はウクレレの
H君、そのまた右がサイド
ギターのM君…この五人が、
ナレオアイランダーズの
メンバーだったのです。

揃いのアロハシャツ…、
といつても無地のシャツで、
裾を外に出しているだけの
アロハでしたけど…。

一応、首に レイをかけて
いましたが、ズボンにはバラ
バラでしたし、五人とも、
ハダシでしたものねえ。

踊るようにベースを弾く
市ちゃんの動きに釣られた
私たちは、調子に乗って、
次から次に持ち歌を披露し、
ついに文化祭担当の先生に、
「もう エエ加減にせえー」
とヤジられました。

*

その年の暮れ、
「市役所のホールで開く、
クリスマス イブのダンス
パーティーで演奏してくれ
たら千円：」

という依頼が舞い込んで
来たのです。
どんな筋の話かも考えず、
場所が市役所というだけで
安心して引き受けました。
一九五一年のクリスマス

イブは、何を隠そう、私が
受ける国立二期校 入試の
40日前だったのです。

しかし、ギターを抱えた
私は、ダンスパーティーの
舞台に立っていました。

演奏曲目も増えていて、
客は満足そうにステップを
踏んでいます。

その客の中に、同窓生の
N君とP君が、女を抱えて
こちらを見ながら 踊って
いるではありませんか。

*

年が明け三学期に入ると、
ダンスパーティーの件が
露見して、父が学校に呼び
出され、

「退学処分もありますよ」
と油を搾られたそうです。

しかし、リーダーだった
敏さんは両親がいなかった
とかで、ウヤムヤに終わった
…と言っていました。

一方、私たちの目の前で
チークダンスをしてみせた
軟派高校生、N君とP君は
バれることなくお咎め無し。

ここで 痛感したことは、
「バレぬことこそ楽しけれ」
ということでした。